特集3

明浜町俵津の文楽すがはら座を次世代に引き継ぐために

愛媛県西予市 俵津文楽すがはら座
座員 浅井 裕史

【はじめに】

ここは西予市明浜町、俵津文楽会館、午後8時。時候は2月。夜な夜な座員が集まり始めます。べべん、べべん「父とさんの名は、十郎兵衛」「母さんなおゆみともうします」べべんっ（三味線）人形浄瑠璃、外題「傾城阿波の鳴門巡礼歌の段」。そうです文楽の練習を開始したのです。

毎年3月最終日曜日のさくら祭り文楽公演に向けた練習は、2月から始まります。今回の外題は「傾城阿波の鳴門巡礼歌の段」・地元の明浜はもとより宇和、野村から座員が約15人集まり練習開始です。

【文楽とは】

ところで、皆さん文楽をご存じですか？文楽とは究極の人形劇ミュージカル。

大夫と三味線に導かれながら、3人で1つの人形を操り、物語を演じる総合舞台です。詳しくは、ネット等で検索してみてくださいね。

三位一体による寿二人三番叟

【俵津文楽すがはら座の紹介】

さて、せっかくの機会ですので、私たち俵津文楽すがはら座の紹介をさせてください。俵津文楽「すがはら座」は、愛媛県有形・無形文化財指定の伝統芸能であります。

嘉永五年（西暦1852年）からの歴史と伝統を持ち、時の村の指導者が情操教育として取り入れたと伝えられ、その後「くぬぎ座」「市村六之丞一座」等を買い足すなど、現在20代から80代の25名の座員が時代の変遷の中で様々な活動を展開し、今日に至っております。

近年の公演としては、3月下旬に行われる「さくら祭り」や定期公演、他地域の文楽保存会との合同公演等で活躍しています。

保存されている人形頭（かしら）は、約100点を超え、作者の銘が確認されている頭が47点あり、天狗久、その弟子で天狗弁、由良亀など明治時代を代表する作品が大半を占めています。衣装も約300点あり、引幕、水引、ふすま、雑品にいたるまで保存され、種類、量、質ともに豊富にあります。

これら人形頭・衣装道具一式とともに愛媛県有形民俗文化財の指定を受けており、芸術品としての価値も高いものであります。興味のある方はぜひ、俵津文楽すがはら座へお越しください。お待ちしてます。

【伝統芸能継承　小中学生への体験取り組み】

さてさて、ようやく本題に入ります。これ

さくら祭り公演に向けた夜の練習風景

からも、伝統芸能文楽をこの過疎の町明浜でどのように継承していくのか、大きな課題です。

座員も年齢を重ねてゆく中、高齢となった座員は「もう重たくて人形は持てんわい」、「足や手が痛くて」と引退していきます。現状のままでは20年後には存続も怪しい状況です。

伝承のための方策として、一つは文楽に興味のある方を説得して加入していただくこと。公演や来場をきっかけにお話しして仲間に入っていただくこともあります。

もう一つは、子どもたちに文楽体験をとおして興味を持ってもらうことです。

俵津文楽すがはら座では、小中学校の理解と協力を得て、課外授業や文化祭等イベント発表に向けて、座員指導による文楽「傾城阿波鳴門巡礼歌の段」を体験してもらいます。

小学校では6年生が学習発表の一環として練習、中学校では2年生が文化祭の出し物として練習し、それぞれが体育館等で保護者や地域の方々にお披露目します。つまりは、明浜の子どもたちは、全員2回文楽を体験することになり、子どもたちに記憶と記録が頭と体に残ります。この練習と体験が担い手を育てています。

生まれ育った町の伝統文化に2度触れることは、とても重要なことです。大多数の子どもたちは、一度は進学等で町を離れますが帰ってきます。実際に定年後、町に帰ってきた方に加入してもらい活躍してます。

特に子どものころ体験したことは心と体に残り、文楽の音色と映像や匂いのDNAが蘇ります。そこがチャンス、すぐさま勧誘し座員として加入してもらいます。

【文楽伝承と未来】

このように町を離れても、いずれ町に帰ったとき、子どものころの体験した記憶が文楽伝承活動と当時の座員を思いだし、やってみようかな、仲間を誘ってみようかなとなることを期待しています。

これからも170年もの間、地域に根付き繋いできた先人と、現在と未来を繋ごうと思います。様々な形をとおして俵津文楽すがはら座を継承し、人形を操り舞台を続けます。

明浜小学校児童と座員の練習風景